した知識の伝授である。儒学・文芸偏重の教育を排除するとともに、臨床上有用であるか否かの観点で伝統理論の取捨選択を行なう。旧説に無条件に盲従することを戒め、初学のうちから衆論の是非を取捨する目を養うことを重視している。このような玄仙の教育研修方針は今なお傾聴すべき点が多いと考える。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）

水野皓山と山本読書室

遠藤正治

蘭山門下の京都の本草家としては、百々俊道・平井宗七郎・山科享庵・上田元孝・福井棣園・水野皓山・山本亡羊・内藤剛甫・物部寿斎らの名がよく知られているが、尾張嘗百社のグループに比しても、これらの人々の事跡はよく解明されているとはいい難い。とくに水野皓山の場合は、著書・門人も多く、『平安人物志』（文化十・文政五・文政十三・天保九年版）に物産家として名が挙げられ、山本亡羊と並んで最もめざましい活動を展開した人物であるはずであるが、上野益三先生も『日本博物学史』において、「その業績の伝わらぬのが惜しまれる」と注記されているほどである。

一、略伝

名は広業、字は士勤、通称源之進、皓山はその号、また観生堂と号した。弘化三年二月一日、享年七十歳で死去し

ているので、逆算して生年は安永六年。若くして小野蘭山について本草を修め、はじめ柳馬場蛸薬師南に住したが、のち富小路錦北に移居した。これまで知られているところは以上であるが、山本榕室著『榕室叢抄』巻十三の次の記事によって若干の事実が明らかになった。

水野皓山、父名春孝、字蘇大、号頌容園、称常安、加賀人、来京業医為山科氏之門人、皓山名広業、字士勤、又号観生堂、又号陶隠子、従蘭山小野先生受本草之学、又従山本逸記、受浅井氏内経之学、称源之進、住富小路錦小路之北、弘化三年丙午二月朔日卒年七十。

ここに、山本逸記とは美濃の人、小野蘭山門人でのち出雲松江藩医となり文化三年藩校・存済館の開設にあたった人と思われる。なお逸記の子安暢（名良臣・号泰淵）は亡羊の門人。

二、著作

医書　医方大成論講解2・皓山傷寒論講解2（読）・皓山大成論講解1（読）・大同類聚方集註1・本著溯洄1（読）・陶陰医書雑抄3（読）・皓山難経講解2（読）・儒門事親類聚方1

本草書　皓山伊吹採薬記1（読）・可恃録1（読）・雞窓随筆1・皓山花鏡校正1（読）・皓山樹木考1・皓山答諸子問事件1（読）・皓山駱駝考証1（読）・古名類聚1・諸書物産抄録1（読）・日光採薬記1（読）・物産品目1・物産余録1・物品類考5・皓山海藻録1（読）・水野本草薬名備考読引3（読）・江村如圭採覧随録1（読）・野氏物産小録2・博物彙考5・漸苞集1（読）

随筆その他　皓山雑件簿1（読）・皓山雑録1・皓山随筆1・皓山続記抄録1（読）・皓山日記10（読）・皓山漫筆1・陶陰随筆1・陶陰雑抄10（読）・水野氏抄録1（読）・観生堂雑抄11（読）・群籍知津14・日本後紀人名備考2

以上三九点のうち、三六点は『国書総目録』に載り、三四点は岩瀬文庫に現在所蔵されている。（読）と記した書は『山本読書室蔵書目録』（山本規矩三編と推定される）に記録されていることを示している。これが二〇点あり、山本読書室の大半が岩瀬文庫に移っていることを考えると、皓山没後水野家は絶家し、皓山の著作の大部分は日記類を含めて山本読書室に移され、さらに明治四十年岩瀬文庫の所蔵

に帰したものと推察される。

三、門人

皓山の門人としては、山澄甫庵・杉山恭蔵・平田景順などが著名であるが、『皓山日記』によればこのほか相当多数の門人を教育していたことが窺われる。皓山没後は亡羊について学んだ例に平田景順があるが、読書室物産会には皓山の一門もよく協力して出品参加している。皓山自身は読書室物産会の文化五年の初回から死去する前年の弘化二年の第三二回までほぼ毎年欠かさず出品し、亡羊と協力して京都本草学隆盛のためによく尽力したことがわかる。

（岐阜県立大垣工業高等学校）

江戸時代後期の小児科学

安達原曄子

江戸時代後期を一八世紀末から一九世紀末とすると、この頃には小児科を専門とする医家も増え、専門書も多い。ここでは小児科専門書である『保嬰須知』（片倉鶴陵）、および『医事小言』（原南陽）、『提耳談』（北尾春圃）、『観聚方要補』（多紀元簡）、『校正方輿輗』（有持桂里）、『内科秘録』（本間棗軒）の小児篇をとりあげた。本間棗軒を除けば、これらの医書の著者は一七五〇年代に生まれており、同年代といえる。原南陽と本間棗軒は古方派で蘭学もとり入れており、多紀元簡は考証学派、片倉鶴陵も多紀家で学んだが賀川玄迪、嶺春泰にも学んでいる。有持桂里は折衷派で、北尾春圃は田代三喜の伝を受け継いだともいわれる。これらの異なった流派に属する医家の六書の小児科領域を調べた。

項目については、どの書も驚（驚風、急慢驚）、および疳を